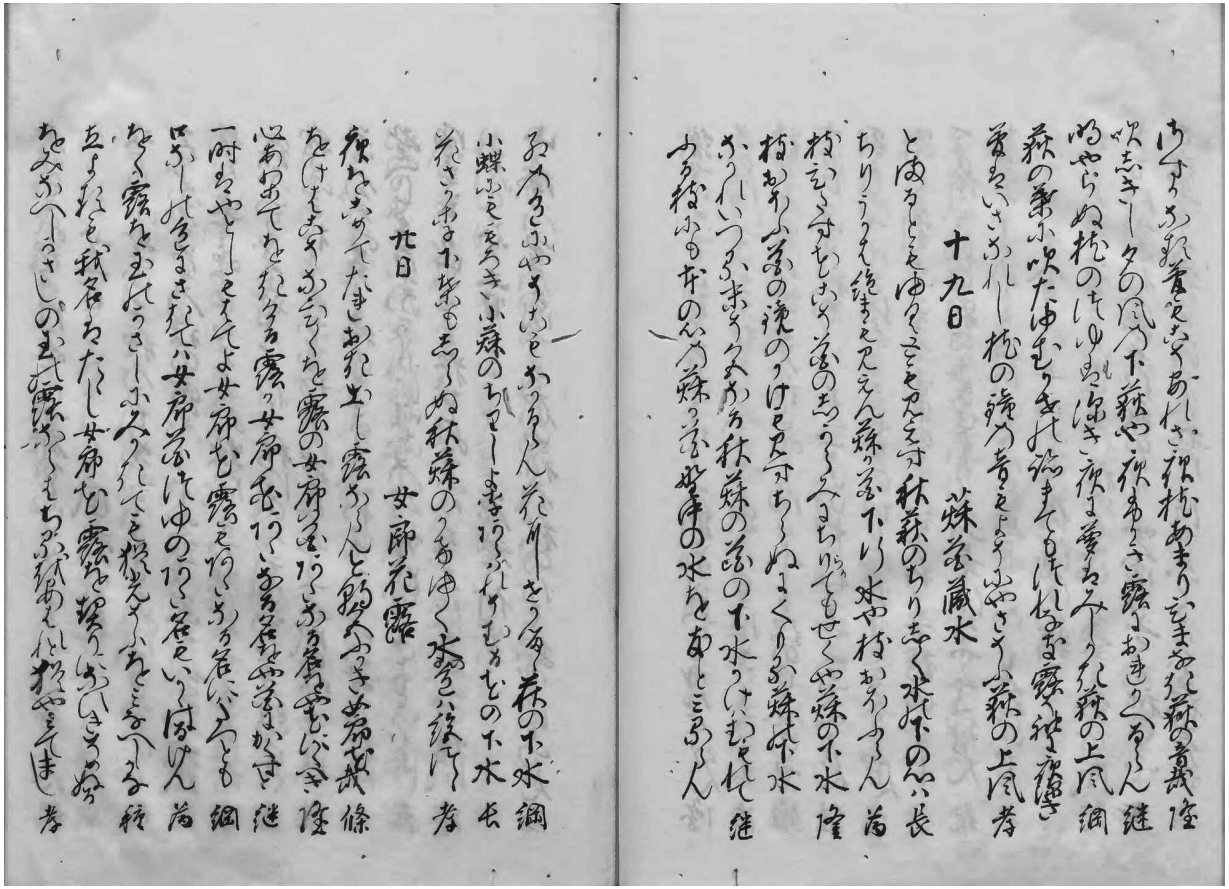
岡山朝日研究紀要　第四十三号（二〇二二年三月）抜刷

永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌

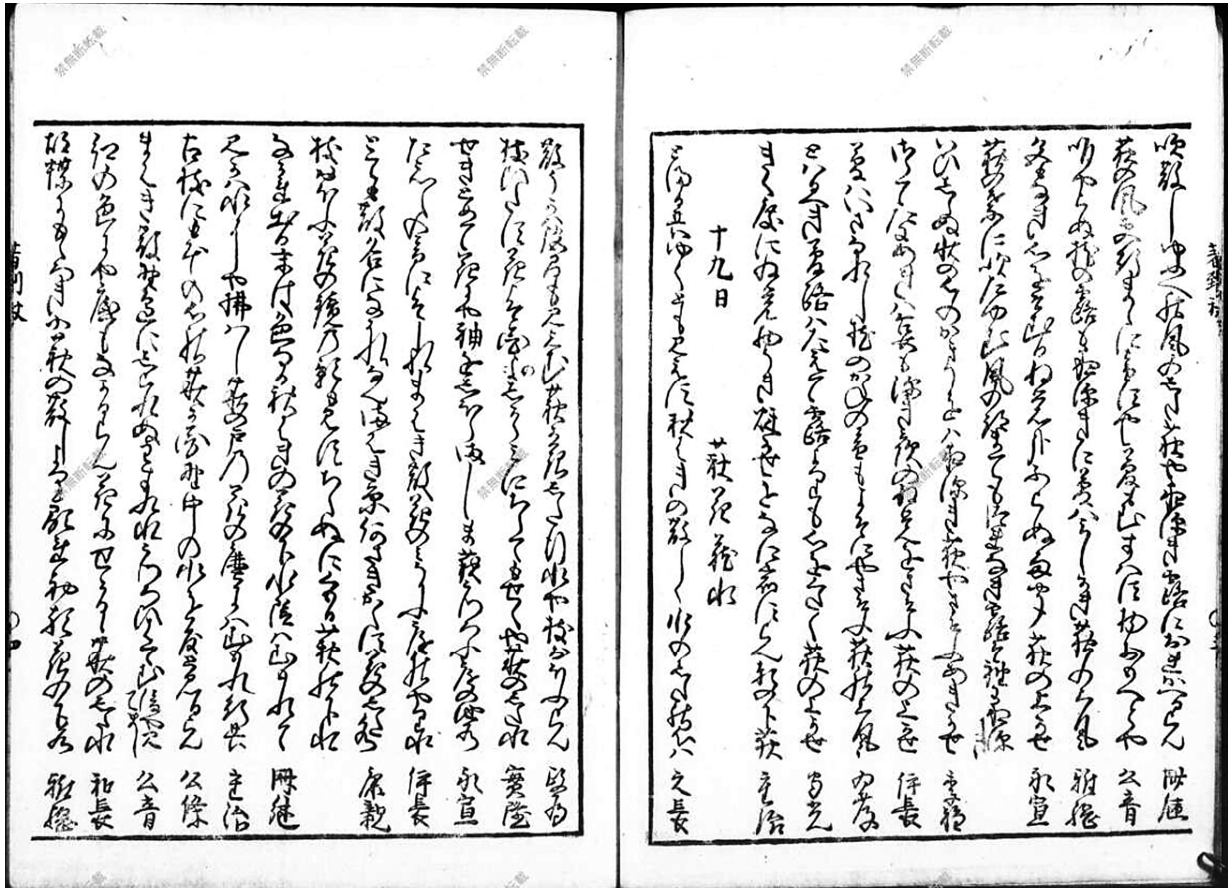
秋・冬の部

辰田芳雄



後柏原天皇主催永正６年９月９日起日著到和歌（内閣文庫「著到和歌」）　国立公文書館デジタルアーカイブより

10月19日　萩花蔵水　秋の５



後柏原院御着到百首　宝永２年板本（酒田市立光丘図書館蔵）　国文学研究資料館データベースより

10月19日　萩花蔵水　秋の５

永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌　秋・冬の部

辰田芳雄

はじめに

昨年の紀要四二号に続き、国立公文書館内閣文庫「著到和歌」のうち、永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌の秋（二〇日）・冬（一五日）を翻刻する。

今回の翻刻・対校作業の中で特に気づいたことを二点、列挙する。

まず、対校本とした一九〇七年出版『続々群書類従』所収の「後柏原院御日次結題」は、正徳三年（一七一三）の板本を活字化したものであるが、板本の誤転写がある。以下の秋・冬の部の翻刻でも注記しているが、以下に一括して紹介する。例えば、次の秋の2では、板本で「御船」とあるところを「筏」と誤っている。

秋の2　十六日　二星適逢

1　七夕のまれのあふ瀬にこゝろせよ　紅葉の筏かさゝきのはし　公條　御船→筏

秋の5　十九日　萩花蔵水（グラビア写真参照）

8　ながれ出るすゑは色なる秋はきの　花の下水かけはうもれて　済継　む→う

9　みかは水よしや拂はし萩の戸の花の　ちりにはうもれ行とも　重治　む→う

10　ふる枝にもとのこゝろのはきか花　野中の水を夏と見るらん　公條　友→夏

秋の8　廿二日　鹿聲何方

8　この頃の野分川風いつれなほ　身にしむ鹿のこゑに吹らん　御製　山→川

秋の14　廿八日　雲間稲妻

15　空にしもうつると見しや程もなく　かへる雲井の稲妻のかけ　雅綱　こゝ→空

秋の16　卅日　霧中求泊

6　霧くらきみつの泊は見つとしても　なくそまよふ秋のふな人　政為　としも→としても

秋の17　十一月一日　伴菊延齢

15　うつらふと見るも盛の秋の来て　老せぬ花に身をや忘れむ　御製　ろ→ら

冬の1　五日　初冬落葉

9　冬きぬとちるを色なる紅葉に　露のたえなくさゆる名もうし　為孝
　　椹葉（もみじば）→紅葉。　は→た

冬の2　六日　遠郷時雨

9　遠かたの里と見るとも曇り来る　しくれは神に猶やなからん　康親
　　袖に程→神に猶

冬の4　八日　濱邊寒蘆

12　蘆の葉に浦風さむく濱ゆふの　幾重の霜をむすひそふらん　御製
　　寒て（さえて）→さむく

次に、対校本である国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本「禁裏御著到和歌」の秋の20・四日山路炁過のうち四番目の和歌の詠者「孝」（為孝）に対して、注釈が記されているので紹介する。「続撰吟ニハ政為トアリ、右ノ哥ト作者入違□、但、続撰吟非之、□（此カ）是非を以類本、可勘知也」（□は、画像28の下が切れていて読めない部分）とある。「続撰吟」が寛政十二年に刊行された尾崎雅嘉『続撰吟和歌集類題』であれば、高松宮家伝来禁裏本「禁裏御著到和歌」が写されたのは、寛政十二年（一八〇〇）以降であることがわかる。

永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌（秋・冬の部）
―国立公文書館内閣文庫「著到和歌」（二〇一―一四六）当該部分の翻刻―

国立公文書館内閣文庫「著到和歌」の一番目（画像3コマ目から64コマ目）が永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌である。春（二〇日）・夏（一五日）・秋（二〇日）・冬（一五日）・恋（一五日）・雑（一五日）、九月九日歳中立春から十二月二十日竹契遐年までの百日分である。これを底本とした。詠者は後柏原天皇・三条西実隆・下冷泉政為・小倉季種・甘露寺元長・田向重治・東坊城和長・冷泉永宣・広橋守光・姉小路済継・三条西公條・下冷泉為孝・四辻公音・中山康親・甘露寺伊長・飛鳥井雅綱の一六人である。

この着到和歌は『続々群書類従』に①「後柏原院御日次結題」としてすでに一九〇七年に活字化されている。この活字化は岡山の藩士野村尚房により翻刻され宝永二年（一七〇五）六月に江戸の本屋で出版され、正徳三年（一七一三）に江戸と京都で再版された②板本を底本としている。一六人の和歌が確認できる公文書館所蔵「著到和歌」以外の写本は、③宮内庁書陵部「後柏原院御着到百首」（伏五四）④国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本「禁裏御著到和歌」、宮城県図書館伊達文庫「近代著到和歌」などが知られているが、①・②・③・④を参照した。翻刻における注（※）での略称は、①…日、②…版、③…伏、④…高とする。

詠者一六人のうちの一部の詠者のみ収めている写本がある。後柏原天皇・三条西実隆・下冷泉政為・姉小路済継の四人の和歌で構成された写本に⑤東京大学史料編纂所「禁裏御著到百首和歌」（阿波国文庫）がある。また、後柏原天皇の百首は⑥『列聖全集・御製集六』に、三条西実隆と三条西公條のそれは⑦「雪玉集」（『国歌大観』『私家集大成・中世Ⅴ』）、下冷泉政為のそれは⑧「権大納言政為卿着到和歌」（井上宗雄氏所蔵、古典文庫第四二八冊『中世百首歌一』）にそれぞれ収められている。翻刻における注（※）での略称は、⑤…阿、⑥…列、⑦…雪、⑧…古とする。

今回は、前回分で掲載が漏れた春の部16と秋の部（二〇日分）・冬の部（一五日分）を翻刻した。

（凡例）

（1）月日（或いは日付）・歌題の下に、秋の部の順番、起日九月九日からの日数の順番を記した。例えば、十一月「三日　紅葉出墻　秋の19　54」は、秋の部では19番目で、全体では54日目という意味である。

（2）各日（各歌題）に十六人・十六首あるはずである。和歌の頭に先頭から順に算用数字でその順番を記した。底本では、例えば十月十六日二星適逢（秋の2）の場合、本来十六首あるべきであるが、十三首しかなく、「欠3…雅綱・和長・為孝」とあるように、欠落している詠者を欠としてその名を記した。十月十七日織女惜別（秋の3）の場合は、八首のみで、「八首のみ（実隆・政為・公條・済継・為孝・和長・康親・御製）」とした。

（3）秋の3以後は、底本の国立公文書館内閣文庫「著到和歌」には欠落している和歌が多い。欠落している和歌は、③宮内庁書陵部「後柏原院御着到百首」（伏五四）により補った。そこで、底本の順の後に、③をその順に配置した。そして、『続々群書類従』所収の①「後白河院御日次結題」での順や③宮内庁書陵部「後柏原院御着到百首」（伏五四）の順を和歌の上部に記した。例えば、十七日　織女惜別　秋の3　38　の「日4 伏7　6　心よハき別もさそな小車の　うしひきわたす鵲のはし　長」という東坊城和長の歌は、底本では六番目であるが、日（①「後白河院御日次結題」）では四番目・伏（③宮内庁書陵部「後柏原院御着到百首」）では七番目であることを示している。なお、①と③が同じ順であれば、①で代表させ「日4　6」のように表記にした。

（4）上の句と下の句の間を一文字分空けて一行に記し、最後に詠者を記した。詠者は底本の記載通りにした。また、平仮名の字母は、右側に小さくそれを記した。

（5）網掛けを施した部分は、※の後に注記した。※のあとに略称がないものは、底本である公文書館所蔵「著到和歌」についての注である。例えば、「※か（のィ）」の場合は、網掛けの字の「か」の右側に記されている注書きである。「※日…」は、①『続々群書類従』「後白河院御日次結題」の異なった記載である。「版…」は①が②版本と異なる場合（恐らく転写誤り）である。他の写本の異同も略称で示した。一つの歌に複数の注がある場合は、「※2」などとした。

十五日　幽栖秋来　秋の1　36

1 すむ身たにたへしと思蓬生に　露うちみたれ烋ハきにけり　永宣
2 秋かせのたよりはかりやなへて世の　かすにはもれぬ蓬生のかけ　為孝
3 とちハて、思ひし道の草葉にも　さハらぬ物か秋はきにけり　済継
※はきにけり（のはつかせイ）。※高…同様
4 とちはつる葎の内もそのまゝに　いつくを烋の道芝のつゆ　和長
5 思ふとも花にはさかし草の戸の　色をもまたぬ秋ハきにけり　政為
6 わひてすむよもきか門の夕暮に　待としもなき秋のはつかせ　元長
7 いつとなく心より置露をこそ　なへての烋もやとゝきつらむ　実隆
8 くむ人もみえぬいたゐの水の上に　桐の葉おつる秋ハきにけり　公條
9 山陰の松の戸ほそをとひきても　さひしき物や秋のはつ風　重治
※日…扉
10 さひしさををのかものなる蓬生の　宿にやかて烋をしるらん　公音
※日…お
11 初風に露うちちりて蓬生の　かけにもけさや秋のきぬらん　雅綱
12 つゆむすふけさよりしるし跡ミえぬ　庭の蓬や秋の通風　季種
13 松の戸は色なき秋を吹かハる　風のたよりに先しらせけり　伊長
14 いかならむかねても露の八重葎　しける宿の秋のはつ風
15 しられしの浅茅かおくの音伝も　人ならましの秋のはつ風
※日…つれ。伏…信
16 さしこもる葎の門も今そしる　秋くる風のたよりありとハ　康親

十六日　二星適逢　秋の2　37　欠…雅綱・和長・為孝

1 七夕の稀のあふせに心せよ　もみちのミ舟かさゝきのはし　公條
※日…筏。版…御船。伏…ミふね。高…ミ舟。雪…みふね
2 一年の空をへたての雲霧も　けふや晴間のほし合のかけ　継
※阿…のうら。古…はうき
3 七夕のけふの契のうれしさハ　たかかす袖になをあまるらん　親
4 あはぬ夜も契りになして七夕の　年に稀なる独寝もかな　長
5 一年のうらミはよゝにふりぬとも　さらにや夢の星合はうき　為
6 織女はさらにこよひそ新枕　ことの契りともせん
※阿…七夕。※2阿…あとなし
7 恨をハ書もつくさぬ行ゑとや　猶又月のほし合のそら　光
8 星合の秋の日数の七くるま　つむともつきしつくす心ハ　宣
9 橋柱遠きたえまもゆきあひの　こよひ名におふ天の川なミ　種
10 待程やたのミならまし邂逅の　契りあやなき星合のそら　長
日12 11 たまさかにあふ夜うれしと七夕の　天の羽衣うらミもやなき　音
日14 12 一年に一夜かハすハ七夕に　たかかしそめしまくらなるらん　治
日16 13 待みるもなきさをきよミひろふてふ　たま〳〵けふの天の川なミ　隆
※も（やイ）。阿…や。※2阿…舟
日11 ひとゝせをかたる言はの露の間を　思ふもわかぬほしあひの空　雅綱
日13 まれに逢恨のミして七夕ハ　いひよる中のハしめともなし　和長
日15 うらみとかいふもはかなし七夕の　夢もまれなる契ハかりに　為孝

十七日　織女惜別　秋の3　38

8首のみ（御製・実隆・政為・和長・済継・公條・為孝・康親）

伏日1 15　1　織女のなかき契はなにならて　別るゝたひに身をくたくらん　隆　※日・雪…七夕

伏日2 16　2　そのまゝにかハる契を人にみよ　別るゝ星のうけハうきかは　為　※日…物

伏日3 1　3　待〳〵てこゝろやすめん程たにも　またみしか夜の星合のそら　條

伏日4 12　4　七夕の涙の袂ほしもあへす　このわかれにや又しほるらん　継

伏日5 2　5　別ちのつらさをしらは七夕の　あハぬ月日もなくさミやせん　孝

伏日7 4　6　心よハき別もさそな小車の　うしひきわたす鵲のはし　長

伏日8 5　7　天の川今朝の別のうき世より　たつ年浪をやかて待つらん　親

伏日10 14　8　今ハとてよそなる嶺のよこ雲に　思ふもかなし今朝の別ち　長

※日…星合の空。※2日…御製

伏日6 3　七夕の幾世の怀のわかれちを　心なかくもしたひきぬらむ　重治

伏日9 6　たなハたに人のかしつる袖かけて　ぬらすにあかぬ今朝の別路　元長

伏日11 7　七夕の別のなみに今朝よりや　もみちの橋に時雨そむらん　守光

伏日12 8　あふほともなミたをかけて織女の　手引の糸の立やわかれむ　永宣

伏日13 9　彦星のあはぬ日数にくらやみは　一夜の別なをうかるらん　季種

伏日14 10　かきりなき秋ハちきれと七夕の　あかぬ別やしたひわふらん　伊長

伏日15 11　たなはたの今朝のわかれにかへやせむ　いくとし〳〵の契成とも　雅綱

伏日16 12　さそなけに天河原のあま雲の　わかれとやらむ曙の空　公音

十八日　夜深聞荻　秋の4　39

8首のみ（御製・実隆・政為・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日2　1　おとろかす夢もこそあれね覚にハ　いとはてきかん荻の上風　親

日4　2　とはは やな枕露けき荻のをとに　人まちふくる袖ハいかにと　為

日5　3　さ夜ふけて露も落らん秋風に　つれなくかハる荻の声哉　條

日6　4　さすかなる夢もこそあれさ夜枕　あまりひまなき荻の音哉　隆

日7　5　吹しきし夕の風の下荻や　夜ふかき露におれかへるらん　継

※日…ちらし。版…散し。伏・高…しきし。

日9　6　明やらぬ枕のつゆは深き夜に　夢はみしかき荻の上風　綱

※日…夜深き。伏・高…深き夜

日11　7　荻の葉に吹たゆむかせの跡までも　つれなき露そ袖に夜深き

日14　8　夢はいさなれし秋の鐘の音も　よそにやさそふ荻の上風　孝

日1　ともし火のまたゝく影をしるへにて　窓より荻もねやの秋かせ　和長

日3　見し夢のおとろくのミかさ夜深て　又もねられぬ荻のうは風　元長

日8　荻の風ふけ行まてに音すなり　夢もむすハす物思へとや　公音　※日…、

日10　色もなき心をそむるね覚かな　ふらぬ雨聞荻のうは風　永宣

日12　いひしらぬ秋の心のかきりをは　夜ふかき荻やさそふ秋かせ　季種

日13　さらてたに秋ハ哀もふかきよの　ね覚をさそふ荻の上風　伊長

日15　とハるへき夢路ハたえて露よりも　心をくたく荻の上風　守光

日16　聞たひに寝覚物うき秋風を　なにやとすらむ軒の下荻　重治

十九日　萩花蔵水　秋の5　40

9首のみ（御製・実隆・政為・和長・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日1　1　とまるともゆくとも見えす秋萩の　ちりしく水の下の心ハ　長
日2　2　ちりうかは絶まも見えん萩か花　下行水や枝おほふらん　為
日3　3　枝ひたす花こそ花のしからみに　ちりてもせくや萩の下水　隆
※日…よ。版…よの。※2り（らイ）。※3阿…を
日7　4　枝おほふ花の鏡のかけも見す　ちらぬにくもる萩の下水
伏日9 8　5　なかれいつる末そ色なる秋萩の　花の下水かけハむもれて　継
※阿…き。※2阿…行。※3日…う。版…む
伏日11 10　6　ふる枝にも本の心の萩か花　野中の水を友とミるらん　■
※日…夏。版…友。※2日・伏…公條
伏日13 12　7　紅の色にやそこもなかるらん　花にせかるゝ萩の下水　綱
※日…和長。伏・高…雅綱
伏日14 13　8　小蝶にももろき小萩のちりしより　あらハれそむる花の下水　長
※日…雅綱。伏・高…和長
伏日15 14　9　花さかり下葉もしらぬ秋萩のかけゆく水の色ハ絶つゝ　孝
日4　せきとめて花にや袖をしほるまし　真萩うつろふ庭の池水　永宣
※日…ら。※2日…ら
日5　たえ〳〵の音にこそしれ真萩散　花のミうかふ庭の遣水　伊長
日6　とても散名になかれなむま萩原　なに咲かくす花の下水　康親
日欠 8　影うつす契やかれぬ遣秋を　ふるえの萩の花のしたミつ　守光
日9 10　みかは水よしやハらハし萩の戸の　はなの萃にはむもれ行とも　重治
※日…ちり。※2日…う
日10 12　真萩咲野へにしられぬ忘水　うつろひはてむ後やみてまし　公音
※日…散る。版…散
伏日15　うつめなをちりなむ後も萩か花　よそにさそハぬ庭の遣水　季種

廿日　女郎花露　秋の6　41

9首のみ（御製・実隆・政為・季種・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日1　1　夜をこめてたれおき出し露ならん　今朝色ふかき女郎花哉　條
日2　2　をけはこそなひくを露の女郎花　あたなる名をや花にかくへき　隆
日4　3　心ありてをきける露か女郎花　あたなる名をや花にかくすと　継
日5　4　一時はやとしもはてよ女郎花　露もあたなる名にハたつとも　綱
日8　5　口なしの色にさきてハ女郎花　つゆのあた名もいかゝはるけん　為
※阿…そめ。※2阿…に
日9　6　をく露を玉のかさしにみかきても　猶光そふをミなへしかな　種
日12　7　立よるも我名はたゝし女郎花　露を契りになひきそめぬる
日15　8　をみなへしかさしの玉の露ならは　ちるをあはれと猶やミてまし　孝
日16　9　露のまの契りはかりに女郎花　心よハくもはやなひくらん　親
日3　をみなへしなひきなハてそ夕霧の　むすふもあたの契ハかりに　重治
日6　名にめてハ露のなさけも女郎花　はなにハあさき色やミゆらん　永宣
日7　しハしなと心もをかてをみなへし　あためく露になひきそめけん　元長
※日…お
日10　駒なへて野へ行人の袖の上に　露はおちけるをもなへしかな　公音
日11　置まよふ露もえならすさく枝に　うつれハおなし女郎花哉　伊長
日13　をく露になひきハてゝもをミなへし　しめゆふ野へのぬしな忘そ　守光
日14　なひくとも露こそかこと女郎花　人におほかる心見えすは　和長

廿一日　風動野花　秋の7　42

8首のみ（御製・実隆・政為・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日2　1　吹からに野への千種のうちなひき　めにミぬ風も色つきにけり　條

日4　2　色もなき草の袂の露ならは　しるてもしほれ野への秋風　継

※阿…から。※2日…ひ。伏・高…ゐ

日5　3　野を遠ミ吹とは見えぬ炎風に　ひとかたなひく花薄哉　綱

日8　4　露なひく花野をミれは秋風の　心ひとつを千種にそをく　為

※阿…に。※2阿…お

日10　5　我たにもおしとて花にわけぬ野を　しらすや風の吹すてゝ行　親

日11　6　花の色の千ゝに物こそとハかりに　わか身ひとつの野への秋風　※阿…も

日13　7　野へハ今千種なからに咲花の　いつれを風のよきよといはまし　孝

※日・伏…いさ。高…いま

日16　8　まさきちる山よりも猶花の上に　心をしほる野への炎風　隆

※阿…へる花

日1　野邊ハいま真野の浦風あさ夕に　小花の波そよせてかへらぬ　和長

日3　たれをうらみ誰をかしたふ暮野ゝ　風にみたるゝ尾花くすはな　重治

※日…くるゝ

日6　吹ミたす炎の野かせの糸すゝき　そへてもちらぬ花の色哉　永宣

日7　風わたるすそ野の草のかけしけミ　いかなる花か咲て散らん　元長

日9　是もまた野もせの雪かほに出る　尾花か袖をかへすわき風　季種

日12　風みえて尾花ハなひく秋の野に　にほふ千種の色もわかれす　守光

日14　風さハくすゝのゝハらの夕暮に　なひく千種の花やちるらん　伊長

日15　咲花や冬かれまたてしほれまし　野原の風餘はけしき　公音

廿二日　鹿聲何方　秋の8　43

7首のみ（御製・実隆・政為・済継・公條・康親・雅綱）

日1　1　山かせの空に聞ても鹿のねの　秋のあはれや四方にミつらん　條

※雪…や

日3　2　男鹿なく嵐の末よわれならぬ　をのかつまさへきゝかまとハん　継

※日…お

日4　3　秋風のつてもほのかにさそひきて　猶そことなきさをしかの声　綱

日7　4　鹿の音ハいつれか先にさそひこし　峯にも尾にも秋のさよ風　為

日8　5　此比の野分山風いつれ猶　身にしむ鹿の声にふくらぬ

※日…川。※2阿…わか

日10　6　あはれをは我そこたふる鳴鹿や　いつれ山ひこをちこちの声　隆

日13　7　そことなく声きく時やさをしかの　妻とふ道も猶たとるらん　親

日2　たゝへこし尾上やいつく松風の　枕にまよふ棹鹿のこゑ　重治

日5　しる人なく里とひかねて暮る野に　たま〳〵間も男鹿啼声　永宣

日6　遠近に所さためぬ鹿の音ハ　かくるゝ妻やたつねあふらん　元長

日9　明るまて妻もつれなく鳴鹿ハ　ふもとの野へか帰る山路か　季種

日11　磯山もいつくかちかき秋風の　舟にぬる夜のさをしかのこゑ　和長

日12　その山とさためぬ鹿のうへなれや　いつくも炎の心うかれて　公音

日14　しきたへの枕にかハる棹鹿の　こゑさためなき夢ハさめつゝ　為孝

日15　そなたそと聞もさためぬ妻戀に　よろまてまよふ棹鹿の聲　守光

日16　松風のさハく夕へハいつくそと　きゝもわかれぬ小男鹿のこゑ　伊長

廿三日　秋夕傷心　秋の9　44

欠…永宣・重治・元長・守光　※『実隆公記』同日条に記事あり

日1　1　露やしるとしふかゝらぬ秋たにも（志・可・多・尓）　夕ハ袖のぬれしならひを（連・奈）　隆

日4　2　夕にも烁にもかきるうさならぬ（尓・毛・尓・可・奈）　身をさへなとか忍ひそふらん（奈・可）　継

※阿…おもひ

日5　3　夕くれハ一しほまさるあはれさの（本・阿・者）　心をいかて烁にかこたむ（可・尓・可・無）　綱

日7　4　あはれいかになひくあさちの（阿・者・可・尓・奈・飛）　色〳〵も人の心の秋の夕暮（毛・乃）　條

日8　4　又もあハん秋をもしらぬ我身には（毛・阿・毛・志・盤）　うきも名残の夕ならすや（奈）　為

日9　5　烁そとて物おもふことの夕くれを（毛）　心にとふもこたへわひつゝ（尓・多・飛・徒）　音

日10　6　つきて物思ふ人ハいかならん（可・奈）　秋のならひもつらき夕に（奈・飛・徒）　長

※日…夕もつらきならひに

日11　7　いとハしよ夕の秋のそれならて（能・奈）　何をうき身のたくひにかせん（能・多・尓・可）　孝

日12　8　雨の樞草のちまたのおきふしに（多・乃・婦・尓）　猶ワひまさる烁の夕風（飛）　長

※樞（本ノマヽ、槻か窓カ）。日…樞　※2日・伏…さする。※3日…くれ

日13　9　なかめつゝ夕となれはたか世より　うきにしたへぬ秋をしりけん　種

日14　10　ことはりのうき世なりけり心より（古・者・起・奈・利・个・利・里）　思へハ秋の夕くれもなし（奈）

日15　11　うきものといとひハてゝも秋よいま（起・毛・飛・毛）　なかめすつへき夕暮ハなし（奈・可・遍・支）　親

日2　春そとて世の人なみに花も見す（能・奈・尓・春）　我にしらるな秋の夕暮（尓・志・留・奈・能）　永宣

日3　いかにしてわれより老の心にも（可・尓・連・利・尓）　たへける物そ秋の夕くれ（堂・気・留・連）　重治

日6　うきなからいくつの烁をすくしきて（起・奈・可・川・能・春・古）　この夕暮にたへしとすらん（尓・堂・春）　元長

日15　露のくれ草の袂ハいかならん（能・連・多・乃・可・那）　人の心そ秋にしほるゝ（能・尓・保・留）　守光

廿四日　遠天旅鳫　秋の10　45

7首のみ（御製・実隆・政為・済継・公條・康親・雅綱）

日1　1　くるかたのしられて聞もあまつ鳫（多・志）　いつくの雲そかすかなるこゑ（能・可・寸・可・奈・累・古・衛）　継

日2　2　いそくらん都の空ハほとなくて（本・奈）　出しこしちや遠きかりかね（古・可・里・可・祢）　綱

日5　3　中空に思ひわふるや故郷も（尓・日・累）　みやこもとをきあまつ厂かね（古・毛・越・阿・可・年）　條

日6　4　天津厂なにをしほりと雲水の（奈・尓・志・本・利）　跡なき道をわけてきつらん（奈・支）　隆

※日・伏…を

日7　5　こしかたを天津そらにや忍ふらん（古・可・多・越・尓）　雲のへたてのかりの一つら（遍・多・乃・可・里）　為

※阿…ハ。※2日・伏・阿…ハ

日12　6　思ふにもいく海山をしのきこし（尓・志・幾・古）　心やかたる初かりのこゑ（可・多・留・可・李・乃・古・衛）　親

日13　7　待えても都を旅をなく厂の（奈・乃）　声さへ遠き秋そかひなき（可・飛・奈）　親

※を（とカ）。日・高…と。※2秋（空カ）。日・伏・高…秋

日3　みやこにハ見ワたす山もはるけきに（丹・多・春・者・気・尓）　越路の鳫のいくかきぬらん（能・可）　永宣

日4　雲分ていくたひかりの行とくと（天・多・可・利・能）　いつくかおなし旅の中宿（津・可・於・那・能）　元長

日8　やつれこし旅もさそなとくる厂の（屋・連・佐・奈・登・留）　雲路へたてゝかすか成声（邊・多・加・春・可）　重治

日9　たひの空なをはるけしとおもふなと（堂・能・越・者・留・気・奈・与）　都の山を越る鳫かね（能・留・可・年）　公音

※日…ほ

日10　浮雲にまきれて行もほのかなる（尓・満・連・天・保・可・奈・留）　聲をしるへの厂の一つら（志・留・能・津）　伊長

※日…を

日11　天津厂雲のよそなる音つれも（能・奈・留・連）　たれ住山のたよりとかまつ（堂・連・利・可）　為孝

日14　をのかそらへたての雲にねをなきて（能・可・邊・多・尓・祢・越・奈・起）　都いそかぬ厂の哀さ（可・怒・能）　和長

日15　むれてゐる田面や遠きミやこにハ（連・留・起・丹）　空にのミ聞天津厂かね（尓・可・年）　季種

日16　いつくにかやとりハからんくる厂の（津・尓・可・屋・可・留・能）　都を旅のそらにまよひて　守光

廿五日　横峯待月　秋の11　46

8首のみ（御製・実隆・政為・重治・済継・公條・為孝・雅綱）

日2　1　うき雲のよこきる峯の秋風に　心つくせとなれる月かな　條

日3　2　かひかねを今や出らん月影に　猶雲うつむさ夜の中山　隆

日4　3　待ほとはくらきたかねを雲かとも　かけ見ぬ月に先いとふかな　為

※や（ハイ）。日・雪…や。伏・阿…ハ

日7　4　秋風の寒き音羽の滝のうへの　嶺やそなたと月を待かな　治

日8　5　待わひて深行空は横雲の　それかとにほふ峯の月かけ　孝

※日・伏…更

日10　6　心あてに思ひし峯の雲とをく　あたりもいまハにほふ月かけ　継

※日…とほく

日13　7　しはし猶よこきる雲のおも影と　思ひし嶺に月そほのめく　綱

日14　8　待わひぬ麓の雲もかさこしの　嶺こす月に立のほりつゝ

日1　峯高ミよこおりふせる麓にも　月ハ立待のさ夜の中山　永宣

※日…ほ

日2　みねつゝき高きかたへハこくらくて　よそより月の影そほのめく　元長

日7　ミねたかみこゝにこそまてまたすとも　其方の里ハ月やミるらん　伊長

日8　をそくとく出へき月の影ともし　わかれぬ峯につれなくそ待　康親

日11　待侘るたかねの雲もそれなから　松をつくして出る月影　守光

日12　まちわひぬ山のこなたの夕やミに　嶺こす月の出やらぬかけ　季種

日15　このまゝにあけやはなれむまち更る　月の高ねの横雲の空　公音

日16　あちきなく待出し月もよこ雲の　ミね一すしに有明の空　和長

廿六日　明日如畫　秋の12　47

8首のみ（御製・実隆・政為・守光・済継・公條・為孝・康親）

日2　1　よるならぬ都の名をも月影の　千里にミする秋かせの空　條

※雪…すめる

日3　2　山鳥も獨やはねんますかゝみ　てらすハ月の夜るとしもなし　隆

日4　3　なをさりにみしかけいかにすむ月の　よるとハ人のそらめなるらん　為

日7　4　消やらて光そひ行露にこそ　日影を月の空としもしれ　親

日8　5　おくるかとくまなき月におきいて、　思ひしよりもなるゝ影哉　孝

日12　6　さやけさをつゆのひるまと思には　何をかやとり月の下草　継

※日・伏・阿…ふ。高・列…ひ

日14　7　すむまゝに梢のくまもなき月に　よるを忘るゝ鳥の声して　継

日16　8　鳥羽玉のよるとは見えし一村の　雲もよそなる月のひかりハ　光

※日…の。高…も。伏…か

日1　くもりなき月をよるとも思ハてや　ねたる鴉のなきさハくらん　元長

日5　此ころの月の秋にや文まなふ　窓にハ暮る夜を忘るらむ　重治

日6　よるひるとわきてミるへき色なし　くまなき月のてらす光ハ　伊長

日9　鐘の音や月ミぬ里をしらすらん　くまなき空は夜としもなし　永宣

日10　夜を日につきたし人の心まて　さやかにミする月の半空　和長

日11　くまもなき影にむかひてよるとたに　覚えぬ空に更る月哉　雅綱

日13　かはかりの月には誰かふし原の　よるとハいかて枕さためむ　公音

日15　よをへたて露のひるまを面影に　うつす鏡や月晴る空　季種

廿七日　十五夜月　秋の13　48　欠…重治・公音・和長・伊長・季種

日1　1　かたふかてこのまゝミはやかそふれハ　秋の日かすも中そらの月　長

日2　2　これも又天の河原の烽の月　年に一夜の名にやたつらん　條

日3　3　こゝとしもと秋のなか半を月にみて　いかに身にしむ光とかしる　隆

日4　4　月はたゝなへての秋も明石かた　波のも中のかけことにして　為　※阿…も

日6　5　心なき心や空に月もみむ　秋はもなかと名のミめてゝも　親

日7　6　くもらしと月はその名を思ハても　てるこそ秋の最中成けれ　孝

日8　7　大かたの秋をひかりのはしめにて　最中の月そさらにてりそふ　宣

日9　8　一葉より月もる桐の下水も　最中の影やさらにすむらん　綱

日10　9　わきてミむはつきの月も名にたてる　こよひいかなる影かそふらん　綱

日11　10　めくりきて盈ぬる影のいつはあれと　中にも中の秋の夜の月　継

日12　11　かそふるは心のくまか月影の　にる夜半もなき烽のなかはに　光　※日・伏・阿…月。高…影。※2阿…かけ　※日・版…れ。伏・高…る

日5　いかなれは人のくにゝもこよひハと　なかめそめける秋の月影　重治

日11　一とせの穐のうちにもこよひハと　かねて心の月もくもらす　公音

日13　最中そとおもふひかりハかひもなし　しらてあこかれん月にやハあらぬ　和長

日14　穐なからことなるものハ名にたかき　一夜の月の光成けり　伊長

日16　おなしくハ名高き月と聞ハかり　身にしらハやなめてむ惜を　季種

廿八日　雲間稲妻　秋の14　49　8首のみ（御製・実隆・政為・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日2　1　消かへりこの世の露のたくひとや　空なる雲もいなつまの影　條　※日・伏…世を。雪…みの。高…世の

日5　2　とめぬへき影をハいなと稲妻の　雲のよそめにあまりはかなき　為　※日・版…は。伏・高・古…そ。阿…に

日7　3　行ゑなき露の契よいなつまハ　ほのめく雲を面影にして　継

日11　4　村雲のてらしもはてぬ稲妻に　夜る行人や道まよふらん　隆　※日・版…と。伏・高・阿…よ

日12　5　雲くらき暁月の露のまに　かよふともなきいなつまのかけ　孝　※日・伏・高…うへに

日13　6　風さハく雲のたえまの影またて　をのれもれ出るよるの稲妻　親　※日…よひ。伏…宵。高…よゐ

日15　7　こゝにしも移るとみしや程もなく　かへる雲井の稲妻の影　綱　※日…空。版・伏・高…こゝ

日16　8　稲妻の光もおなし末たえて　いつくともなき雲のかけ橋

日1　はかなしとなにおもひけむうき雲を　跡に残して消る稲妻　元長

日3　野辺遠き外山の雲の一むらに　かよひなれたる稲妻の影　重治

日4　いかハかりてらす雲間にいなつまの　程なきかけにミゆる山のは　永宣　※日・版…跡

日6　むら雨の空にまきるゝひかりかな　雲のたえ〳〵ミゆる稲妻　伊長

日8　雲のはに待ぬ光ハいくたひか　心かこかすよひのいなつま　守光

日9　しハしなをおなし雲間にかよひても　有ともたのまぬ宵の稲妻　季種

日10　いなつまのひかりにみれハ村雲の　色冷しき夕やミの空　公音

日14　雲のはも光ハかりのいなつまハ　なにをすかたに時の間もミむ　和長

廿九日　名所擣衣　秋の15　50　欠…季種

1　おりしもあれ龍田の嵐夜や寒き　夕つけ鳥に衣うつ声　隆
2　秋ふかきいく田の森のしたかせの　身にさむしとや衣うつらん　治
3　うちたゆむきそのあさきぬあさはかに　まとろむ程やよそにしられん　為
4　月になる難波のあし火焼すてゝ　こやのほしゐに衣うつなり　宣
※日…軒端。版…軒は。伏・高…はしゐ
5　炉寒きまきの嶋人たへかねて　さらさぬ布も月にうつらん　長
6　衣うつよしのゝおくの炉のかせ　身にしむ色や花に吹こゑ　條
7　秋風の日を経て寒ミ夜もすから　おきゐの里に衣うつなり　長
8　夜を寒ミ今や音羽の山ひこも　こたふるはかり夜うつらん　為
※らん（なりイ）。高も同様
9　須磨の浦や波こゝもとにうちそへて　碪は音のそれとしみなし　親
10　名にも似す里はとをちのさ夜衣　うつ音ちかく枕にそきく　長
11　うつ音よたれを忍ふの里遠ミ　それかあらぬか夜半のさころも　綱
12　すミこしはあらぬ物から深草や　里は野風に衣うつ也
13　をはすてや山風さむき秋のよを　なくさめかねて衣うつなり　音
日15　14　炉篠やと山の里のをくつゆも　よそにしられて衣うつ聲　光
日16　15　衣うつ音は音羽の山こえて　関のこなたもおなし秋風　継
日14　小夜衣うつころよりやまとろまて　おきゐの里の夢ハたえけむ　季種

卅日　霧中求泊　秋の16　51　9首のみ（御製・実隆・政為・和長・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日3　1　もしほやく浦のとまやと漕いれは　霧のまかきにまよふ友舩　條
日5　2　とまりそとみえしは霧のうき嶋に　よせてやさらにまよふ舟人　隆　※阿…浦
日6　3　霧くらきミつのとまりはミつとしも　なくてそまよふ秋の船人　為
※日…としても。版・伏・阿…としも
日8　4　から櫓をす声をしるへにゆく舟も　おなしとまりか夕霧の空　親　※日…お
日9　5　よるもゆく波路なからにこく舟の　泊いつくと霧まよふそら　孝
伏日1016　6　霧ふかミたとる夕の浦つたひ　いつくに舩をさしてとゝめん　長
伏日1110　7　霧のうちはこゝそ泊ときゝてたに　猶まよふへき舟のよるへを　継
伏日1413　8　たのミこし泊いつくと漕ゆかむ　汀もしらぬ浪のゆふきり　綱
伏日1514　9　霧のうちにこき人舩のそのまゝに　こゝを泊とゆくかたやなき
※日…行。伏・高…入。※2阿…こ
日1　行舟や泊いつくとたとるらん　霧間にしけき梶こたへかな　永宣
日2　霧の間に梶こたへして行舟も　いつく泊といふよしハなし　和長
日4　つなくへき舟の泊ハそことしも　おもひさためぬうす霧の空　元長
日7　舟とめてたのむとまりもうしまとや　秋霧闇き沖つ塩風　重治
伏日1211　暮にけりミつとさためむ泊さへ　波路の霧にまよふ舟人　季種
伏日1312　浦遠く霧立まよひ行舟へ　こゝそ泊とよるかたもなし　公音
伏日1615　漕舟や霧のうちにも唐琴の　泊ハ波の音にしらるゝ　守光
※日…中。版…なか

十一月一日　伴菊延齢　秋の17　52

7首のみ（御製・実隆・政為・済継・公條・為孝・雅綱）

日2　1　さく菊のした行水や千世かけて　烋をせくへき花のしからミ　條
日4　2　あかすミて千世もまことに露の間と　思ふはかりの烋の白菊　隆
日5　3　末の秋の花にほへる白菊を　千代のかさしの初とそミる　為
日9　4　あひあひていま九重に咲菊や　露も千年の数にをくらん　孝
日11　5　今もその山路の菊の下水や　くミてつきせぬ秋をしるらん　継
日14　6　萬代の秋もつもらは音にのミ　菊のした露渕とこそミめ　綱
日15　7　うつろふとみるもさかりの秋の菊　老せぬ花に身をや忘れん
※日・版…と。伏・高…の
日1　うへてたにいく穐なれぬ白菊の　花の千とせハまたや待ミむ　永宣
※日…ら。版…ろ。※2日・版…来て。伏…きて。高…きく。列・阿…菊
日3　仙人の住家におふる菊の花　うつす宿にも千世ハへぬへし　元長
日6　仙人の千とせの秋をつむ菊の　九かさねにあかすちきらむ　重治
日7　うつろふをあたにもなさて秋の菊　ひとへに花の千世やちきらむ　康親
日8　白菊の花をしみれハ穐といひ　はるとゝもにもいく世とかしる　和長
日10　うへそへて君か千とせの行来を　そふより契る庭の白菊　伊長
日12　置露に千とせの数のよハひをも　なをつミもへむ庭の白菊　守光
日13　うちハらひ手折かさしも君かため　千世にや千世と菊の上の露　季種
日16　にほへ菊千とせの烋をとし毎に　いくたひなれて契置らん　公音

二日　霜草虫吟　秋の18　53

9首のみ（御製・実隆・政為・永宣・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日1　1　枯はてんかきりやいつれ鳴虫の　声も色なきしもの下草　宣
日2　2　花の色ハあへすうつろふ初霜に　そをたにのこれ松虫の声　條
日4　3　初霜の岡の草根よ虫の音よ　いつれか先ハかれまさるらん　隆
※んとすィ
日5　4　露をこそたのむかけなれ虫のねの　かれぬやいかに霜の下草　為
日8　5　霜にあへすかる〳〵か色もあさちの　をのれさひしき虫の声〳〵　孝
日9　6　虫の音もなひく浅茅の色ことに　霜をくよりや思ひミたるゝ　継
日12　7　置霜の草の底にもなく虫の　猶かれのこる声もこなあれ　綱
日13　8　声〳〵にきゝしも今や秋虫の　独つれなき霜の下草
※阿…する。※2阿…まつ
日14　9　あわれ也霜のかふの草根をも　たのむかけとて虫の鳴よる　親
日3　朝な〳〵霜のふる葉の蓬生に　あさきかけよりよハる虫のね　元長
日6　きり〳〵す聲ハきえ行草かきの　夕日に霜の色そつれなき　重治
日7　木の葉たについにしほるゝ秋の霜　むしのねそへて草ものこらし　和長
日10　霜まよふ草こそあらめ虫のねも　かれゆく野へのゆふへ曙　季種
※日・版…置
日11　草のはらたのむかけなく置霜に　いまいく程を恋むしの聲　公音
日14　をく霜ハはらひもあえぬ草の葉に　つれてや虫もかれそむる聲　守光
※日…へ
日15　虫の音もなをかれ〳〵にをく霜の　色にあけゆく草のはらかな　伊長

三日　紅葉出墻　秋の19　54　7首のみ（御製・実隆・政為・済継・為孝・康親・雅綱）

日16 伏なし　1　たれを又みまくほしとか色に出て　神のいかもこゆる紅葉ゝ　隆
※阿…そ。※2阿…ミ。※3版…桃葉。日…紅葉

日3　2　山里は庭の草かきうれ枯て　枝こす色のふかき紅葉ゝ　為

日6　3　呉竹の根はふとみえし中垣に　あらぬ色そふ炁の紅葉ゝ　孝

日7　4　思へともおほふやせハき神かきの　末こす紅葉嵐ふく也　継

日8　5　露時雨そめつくすより紅葉ゝの　たえまにミゆる庭の枚かき　親

日14　6　隙をあらミ紅葉はよそのなかめにも　あるしにおしきしつの松かき

日15　7　へたてなく中垣こゆる紅葉ゝは　いつれの方をあるしとかミん　綱

日1　中かきの末こすはかりわか物と　ミるは契りのうすもみちかな　元長

日2　山里はかきほにあまるもミち葉の　をく物ふかき秋の冬かな　公條
※日・雪…お。

日4　岡のへのやとの梢の色つきて　まかきや山とよそふミゆらん　重治

日5　はふ蔦の古すへも山の岩垣ハ　かきもこもらぬ紅葉はの色　和長
※日…ゑ。※2日…と

日9　やまかつのかきほの紅葉一枝は　しほり残すもこゝろありけり　永宣

日10　くれ竹のまかきのやまのした　いかなる露の色にいつらむ　伊長

日11　しくれてもかた枝はかりハかひなしと　まかきを山に染る紅葉は　守光

日12　庭にミるあるしよいかに外面にも　こゆるかきほのえたのもみちは　季種

日13　村しくれいかに道たてゝ中垣の　よその木すゑは染まさるらむ　公音

四日　山路炁過　秋の20　55　7首のみ（御製・実隆・政為・済継・公條・為孝・雅綱）

日2　1　末とをくしくるゝ雲の山風に　みえてとまらぬ炁の別路　條
※雪…ほ。伏・高…を

日3　2　別路におふるもそれと葛の葉の　さやまの風に秋やうらミん　隆
※に（よイ）。日雪…よ

日4　3　さらに又わたるもかなし山路ゆく　炁やかきりの色とりの声　為

日8　4　花紅葉思ひのこさぬ山路にも　こゝろをとめす秋やゆくらん　孝
※阿…政為。高…「統撰吟ニハ政為トアリ　右ノ哥ト作者人違■」

日11　5　ゆく秋や有明の月をしるへにて　山路の霜に跡を尋ん　継

日14　6　さをしかの跡たに見えぬ山路にも　しられぬ秋のいつち行らん
※日・伏・高・列・高…ゆる。※2に（とイ）。※3の（はイ）

日16　7　染つくす紅葉のぬさも手向山　木ゝの下道炁や行らん　綱

日1　くれはつる秋のこえゆく跡ならし　草木しほるゝ山のしたみち　元長

日5　たつた山紅葉分まよひくれて行　みやこの秋や夜半にこゆらむ　重治

日6　たえはつるミ山路なからこしかたを　をのかしるへと秋ハゆくらむ　康親

日7　秋もいま露のほそ道わけてゆく　うつの山こえあふ人やなき　和長
※日…葛

日9　なかれては木の葉を残す水もなし　山路をいてゝあきや行らん　永宣

日10　あはれしる山路のをくもけふのミと　おもふにをしき秋のそらかな　伊長

日12　したへとや山路の末にはふ葛の　うらみかほにもかへる穐かな　守光

日13　ちるもみちさそふ嵐の日に　そへて山路の秋そくるゝほとなき　季種

日15　あふ坂やせきもる山のかひもなく　秋ハいまこそ枚のした道　公音

五日　初冬落葉　冬の1　56　欠…重治・公音・季種・守光

日1　1　山かつも山わけころも冬のきて　落葉に袖の色やかふらあむ　長
日2　2　嵐山西こそ烽と思ひしに　落葉を見れは冬もきにけり　宣
日3　3　さそハゝと思ふ木葉や神無月　けふたつかせにはやくちるらん　長
日4　4　根にかへる木葉みたれて庭の面に　いつくを道と冬のきぬらん　元長
日16伏なし　5　ちりはつる木葉に冬の色をミて　枝にすむ鳥秋や恋しき　條
日5　6　一葉にもおとろきそめし秋のかせ　はらひつくして冬きにけり　隆
※日・高・伏・阿・雪…は
日7　7　冬きぬと今朝ふく風や秋にちる　木葉の庭をまたうつむらん　為
日8　8　秋のうちはたへし木葉のかせのよに　もろきを冬の心とやミん　親
日9　9　冬きぬとちるを色なる紅葉ゝに　露のはへなくきゆる名ハうし　孝
※日…紅葉。版…桃葉。※2日…た。版・伏…は。※3日・版…さ。伏・高…き
日11　10　神南備のもりハけふより冬の色に　かねてうつろふ一葉たになき
※日・伏・列…こそ。高・阿…より。※2阿…たまとて
日13　11　冬の色におもひもなすか木々の葉の　名残なきまて今日ハちりつゝ　継
※つゝ（けるイ）。高も同様。日・阿…けり。伏…つゝ
日14　12　庭の面の夜るの落葉をけさミれは　霜を重ねて冬ハきにけり　綱
日6　ふかゝらぬ山の木の葉もミたれそふ　嶺のあらしに冬やきぬらむ　重治
日10　秋もかくもろき木の葉の残なく　ちるもや冬のしるしなるらむ　公音
日12　かせふけは露とミたるゝもみち葉や　霜さむき松の冬をミすらん　季種
日15　ちる木のはまよはぬ物そ冬ハきぬ　あらしや山の道も分けん　守光

六日　遠郷時雨　冬の2　57　欠…伊長・守光・季種・公音

日1　1　住の江の遠里小野やしくるらん　松の梢のふねのうきくも　長
日2　2　時雨つる袖うちはらひ蓑ほして　いり日にくたす宇治の芝舟　宣
日4　3　いく里をしくれし雲の末ならん　ふりミふらすミはるゝ空哉　長
日5　4　たか里の袖をたつねてしくるらん　木の葉の末の遠ちのむら雲　條
日6　5　けふも又ふるの山邊のいかにそと　袖のほかなき夕時雨かな　隆
※ほかなき（る）。日…ほになる。版…ほ二成。高・阿…ほかなる。雪…外なき
日7　6　三輪の山檜原くもれる程もなく　遠ちの里やはや時雨るらん　治
※日・伏…十市。伏・高…遠ち
日8　7　行駒のうかへる雲も山こえて　木幡の里の時雨をそしる　為
日9　8　遠かたのさとゝみるともくもりくる　時雨は袖に程やなからん　親
※日…猶。版・伏・高…程
日10　9　故郷もそなとはかりなかめやる　時雨や袖をまつぬらすらん　孝
日12　10　みるか内に都のそらハ晴そめて　雲ゐる里や今しくるらん　綱
日13　11　生駒山時雨る雲をいかにミん　思ふあたりハありもあらすも
※阿…ゝ。※2阿…や
日14　12　さ夜時雨ふるさと人も此比や　おなししつくに袖ぬらすらん　継
日3　ミやこにハはれぬる雲のゆく末の　麓のさとにいまそしくるゝ　伊長
日11　遠かたの里ハしくれてはれくもる　月のかつらのかけのさむけさ　守光
日15　をちかたにしくるゝ雲ハたかさとの　心あてさへさためなきそら　季種
日16　たか里に袖ほしあへぬ程ならむ　またしくれゆく雲の遠かた　公音

七日　寒草處々　冬の3　58

9首のみ（御製・実隆・政為・重治・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日4　1　露にみし草の袂はほのかにて　をき所なき霜の色かな　條
日5　2　分わひし袖やいつくのむら薄　なかはは霜にくちて残れる　隆　※阿…神
日7　3　あらすなる草の原かなそれかとも　とふへき色ハ稀に残りて　為
日8　4　をく霜は草葉をわけて見えぬとも　村〳〵かるし野への色かな　綱
日9　5　いつ迄の霜をかよそに思ふらん　谷のかけくさ松の下草　継
日10　6　何にかは所をきける初霜の　村〳〵みえてのこる冬草　孝
日13　7　冬枯にいつれかいつれ忘草　こは忍ふへきあきの色かは　※阿…しも
日15　8　かへさまし秋の花野の面影に　いまはたかへる霜の下草　親　※日・伏・高…かつさきし
日16　9　あけまきのかり残しける蓬生や　村〳〵霜むすほゝるらん　治
日1　のこさしと馬草かるをも冬かれに　青葉すくなき霜やおもはむ　永宣
日2　をく霜ハへたてぬ草のいかなれハ　むら〳〵のこる野への冬かれ　伊長
日3　その名をもいつれかいつれかたはかり　ましるしのふの霜のした草　元長
日6　むらすゝきのこるをおもふ色ならて　なを冬かれをまねくのへかハ　和長　※日…かな。版…哉
日11　かれて行草はのこらて初霜に　又むら〳〵の花や見すらん　守光
日12　かれにける後さへかはるおも影や　霜をきまよふ野邊のむら萩　公條　※公音カ
日14　冬ふるき霜はわかしを道のへや　ゆく手にのこる草も有けり　季種

八日　濱邉寒蘆　冬の4　59

欠…重治・守光・伊長・公音・季種

日1　1　嶋たつも霜夜をわひて夕浪の　あしまにさむきミつのはま風　宣
日2　2　濱風にしほこすあしのかれ葉を　もくつになして浪かな　長　※日…よする。伏・高…かへる
日3　3　夕日影入江のあしのかれしより　濱松か枝の色そさひしき　條　※雪…も
日4　4　濱ひさし久しく浪にしほれあしの　音もかハりて霜さやく也　隆
日5　5　あらはるゝ濱松かえの色をミよ　霜にやたへぬ浪のむらあし　為
日7　6　花も葉もちりしハいつのはま楸　かれたる芦の音はかりして　長　※日・伏…つ。高…る
日8　7　濱河やこほる汀にたつ蘆の　葉風も浪も音ハたえつゝ　孝
日12　8　蘆の葉に浦風さえて濱ゆふの　いく重の霜をむすひそふらん　※日…さむく。版…寒て。伏・高・阿・列…さえて
日14　9　しほれゆく芦への霜の朝な〳〵　濱の真砂の末ハはれつゝ　継　※は（か本ノママ）れ。高も同様。日…晴。伏…はれ。阿…かれ
日15　10　音そよく汀の芦ハ枯ふして　濱松かえに残るうらかせ　綱
日16　11　吹たゆと松には三津の濱風も　枯葉のあしに音そ残れる　親
日6　はま川の行かた見えてむらあしの　かれ葉にこほる水のしら浪　重治
日9　霜まよふあしのかれ葉の一むらに　なをはま松の色そつれなき　守光
日10　はまかせに行かふ人のそてかけて　あしのかれ葉をしほるころかな　伊長
日11　はまかせのふく方見えてあしの葉の　なひきしまゝにこほる浪哉　公音
日13　かけさひし楸ハちかし濱かせに　なミこす芦のかるゝひとむら　季種

九日　月照網代　冬の5　60　欠…重治・永宣・守光・伊長・公音

日1　1　人もねぬあしろの床のかりひさし　今ハ月のミもりあかしつゝ　長（毛祢能可梨飛）

日2　2　あしろもる瀬々のあたりはすむ月の　影ミし水もこほらさりけり　條（毛累阿多梨盤古本佐利个里）
※日…る。伏・雪…り

日5　3　鵜かひ人いつより冬ハあしろ木に　やミをはかなミ月にもるらん　長（可飛李尓者可奈尓毛）

日6　4　年波を思ふやうちのあしろもり　つもれは老の月もすさまし　為（能毛利毛者毛満）

日8　5　曇なき月にはありともあいろもり　たく火にまさる影とやハミる　継（奈支尓盤阿李毛毛尓満）

日9　6　袖の上に浪と月とをやとしてや　此里人ハあしろもるらん　親（越阿毛）

日10　7　よせてのミかへらぬ浪と月影も　もるや網代の床のさむけさ　孝（可毛乃个）

日11　8　網代木に月の氷も猶さえて　もる袖さそな宇治の川風　綱（尓佐毛累佐奈）

日13　9　よ川たつ宇治の里人いつのまに　いとはぬ月と網代もるらし　種（与多乃万尓者毛累）
※日・版…ん。伏・高…し

日15　10　波風を忘れて袖にやとすとも　さこそあしろの床の月かけ（尓毛佐古乃可）

日16　11　河風によるのかゝり火影もなし　網代ハ月にまかせてやもる　隆（尓満可世毛類）
※日・版…見る。伏・高・雪…もる。阿…みん

日3　濱はかりよるのあしろをもる月の　すさましけなる宇治の河風　重治（者可利留能毛春満奈留）

日4　ふりはつる田上河の網代もる　秋より後の月やいかなる　永宣（利者川留農毛留可那留）
※日…も

日7　もるわさの宇治の網代木さゆる夜ハ　月の氷によるひをやなき　守光（留乃尓留遠奈）

日12　河風もうちの網代のうきふしを　とふになくさむ床の月かけ　伊長（毛地農婦遠婦耳奈可）

日14　あしろ木によるの河音ふり行は　空たかくこそ月もすミけれ　公音（丹留能婦気半可春个）

十日　連日鷹狩　冬の6　61　9首のみ（御製・実隆・政為・守光・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日1　1　明日もこんけふの狩場の名残あれや　くるゝ末野にきゝす鳴也　條（毛古累尓）

日2　2　いつまもてかけふはかりとのかり夜　かさなる山のあかぬとたちに　隆（万可个者可里可李奈留乃耳）

日6　3　待人もけふたつ鳥もはかなくや　あすをハたのむこゝろなるらん　為（毛个多毛者可奈奈）
※日・伏・高…狩人。※2日・版・伏…なし

日8　4　犬もなつミせこもつかれぬ鳥のひく　遠の山本あすやからまし　親（毛奈可飛可満）

日10　5　草ふしやつかれの鳥のけふまてに　また残りける雪のミかりは　光（可能个尓多里个可利者）

日11　6　あすもこん山遠からぬ家路にや　暮ぬとみてもかへるかり人　継（毛古可尓可遍可）
※に（とイ）。高も同様。日…と。伏・阿…に

日14　7　七夕の一夜の宿もいくよねむ　あまの河原のあかぬかりはに（乃毛祢万能乃可个可利者尓）
※阿…あくたかはにひかすかそへて　ハしたかのつかふる道やたかふ狩人

日15　8　けふも猶とたちハしらすかり人の　昨日の山をかへてこそゆけ　綱（个毛多須可梨个遠可）

日16　9　かりつくす程もしられてけふハはや　昨日はかりの鳥たちたになし　孝（可利徒毛志者可里能多尓奈）
※日…す（版…須）。伏・高…て

日3　けふもまたなをとりかかむ手になれぬ　あかけのたかの心しるまて　永宣（気多奈遠利加可奈連可遣堂可能志留）

日4　はしたかのあかぬかりはのけふいく日　くるすの小野の雪はらふらむ　重治（者可能可利者个具留能者）

日5　鳥もはや日なミのかりはかくれミん　かたのゝましはおりつくしつゝ　和長（毛者奈能可利者可多能満者徒）

日7　ふミしたくきのふの野への雪の上に　けふはまかはぬとりのおり草　元長（布堂幾能能尓可者利能利）

日9　かりくらすきのふにあかすけふも又　鳥たちをかへていそくたか人　伊長（閑利羅春尓可須个多越可多可）

日12　芹川にはなミかそへてはし鷹の　つかふるみちやおもふかり人　季種（丹奈可者徒可利）

日13　けふハまた昨日の野への路かへて　鳥のをち草わけつゝそゆく　公音（多能可遠気徒遊）

十一日　薄暮千鳥　冬の7　62　欠…永宣・和長・元長・伊長・雅綱・守光

日3　1　くる丶夜のもしほ火くらき折しもあれ　妻とふ千鳥声しのふらん　為
日5　2　夕波のよりくる程を鳴たちて　声とをからぬいそちとりかな　親
日6　3　今はとて妻とふ波の夕千鳥　さそまつかたもねにハなくらん　孝
日7　4　身にしむハ炑より後の夕かな　あはれ千鳥のたちゐなくそら　條
日8　5　あさりする真砂をひろミ夕しほの　ひかたの千鳥うちとけて鳴　隆
日12　6　さしくるやしほもくもりて夕なミの　たつ空わかぬ村千鳥哉　継
日13　7　夕しほの入江のたつの友千鳥　声をかハしていまか鳴らん
日14　8　夕しほにたつや千鳥のうちわひて　おなし汀にかへる波哉　音
日15　9　いたつらにけふもくらしてあすか風　わか友千鳥川へにそなく　種
日16　10　橋立や松風さむミ夕千鳥　日も入海のなミになくなり　治
日1　くれわたるそかのかはらの河千鳥　聲き丶すて丶たれかへるらん　永宣
日2　なきよるやかもの川せの夕千鳥　君にや千世をきこへあけつ丶　和長　※日…え
日4　夕しほのいそへにミつのはま千鳥　ふたりもつれす立わかれつ丶　元長
日9　夕くれの波路はるけきうら千鳥　聲やしるへに友さそふらん　伊長
日10　風さむミ夕塩ミてはむら千とり　かたもさためすたちさハく聲　雅綱
日11　海はらやゆふへの雲のそれなから　なをたちつる丶むら千とり哉　守光

十二日　氷留水聲　冬の8　63　9首のみ（御製・実隆・政為・元長・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日1　1　たゆるとはみえぬ物から岩波の　こほりての名や音なしの滝　長
日2　2　人目のミ思ひし物を山ミすの　かれぬたよりも氷はてつ丶　親
日4　3　音たゆる谷の氷のしからみや　せくにまさらぬ水かさならん　孝
日5　4　山河も冬ハ氷に音絶て　松かせはかりうきものハなし　條
日伏7　5　音せぬそ氷の音よ山水の　むせふをとへハしたにむせひて　隆　※阿…す
日伏8　6　音するも音せぬ時もさひしとハ　わか山水のこほりにそしる　為
日伏11　7　こほりてハ音せぬ水よ物ことに　絶ぬなかれのありときくにも
日伏1413　8　いとひしを思ひしれとや山水の　音を絶ても今朝こほるらん　継
日伏1516　9　今日いくが氷はて丶やおつとみる　滝のしら波音はたゆらむ　綱　※日…日（ひ）。伏・高…か
日伏3　あさき瀬もをくにハひ丶く瀧波の　いかにこほりて音はたえけむ　永宣　※日・版…せ
日伏6　氷りても月はなかる丶岩こえて　ゆく瀬の水の行音はなし　和長
日伏9　あら磯の波ハしつかにこほりゐて　空にはけしきやまかせの聲　伊長
日伏10　よる浪ハ奈にのこりて山水の　氷のうへを吹あらしかな　守光
日伏1216　やまかわの音たえにけりこす波も　こほる岩間をしからミにして　重治
日伏1312　山水のかすかにかよふ聲もなし　いはねの苔をとつる氷に　公音
日伏1413　さ夜かせもけさ見るはかり浅きせに　ミたる丶水ハこほりとちけり　季種

十三日　寒閨聞霰　冬の9　64

8首のみ（御製・実隆・政為・元長・済継・公條・為孝・康親）

日1　1　板間よりもらぬ霰も閨の中の　ふすまの下にさえとをりつゝ　長
日2　2　夜をさむミ閨の枕にいく度か　霰も夢もミたれはつらむ　親
日4　3　袖になをはらひそかぬる玉あられ　たまらぬねやハさえあかしつゝ　孝
日5　4　あられふる夜半の枕よ草の庵の　雨には残る夢もありけん　條
日7　5　霰ふる音につけても竹ちかき　夜床はさらにねんかたもなし　隆
日8　6　みる夢ハあられ霰と音たてゝ　夜深くさゆるねやのうち哉　為
※日・版…あらし嵐。伏…あらハあられ。高・阿…あられあられ。※2阿…ふかくも
日12　7　衣うつ秋の風にもたえさりし　ねやは霰のちるにまかせて
日16　8　閨の上にたえ〳〵散て玉あられ　かそふはかりの声のさやけさ　継
日3　ねやのうへにちりくる音のさむけさハ　身にとをりてもふるあられかな　永宣
※日…ほ
日6　降つもれ篠ふくねやの玉霰　これをや玉のいらかにもミん　和長
日9　あはらなるいたましられて閨中に　ちりくるあられ音のすくなき　雅綱
日10　もる月はねやのいた間に影きえて　音のミのこる玉あられかな　伊長
日11　あれまさる板間しられて閨のうちに　音きくよるもちる霰かな　守光
日13　風さむミあられくたくる閨のうちハ　おとろくほとの夢をたにミす　重治
日14　閨のうへにあられ乱て霜こほる　まくらの夢ハ結ふまもなし　公音
日15　さし向ふかけもしめりてをとにきく　あられにさはく閨のともし火　季種

十四日　水鳥馴船　冬の10　65

8首のみ（御製・実隆・政為・済継・公條・為孝・康親）

日1　1　舟人のおなし心に馴きてハ　夢もいく夜そなみのをしかも　親
日3　2　水鳥も外を行舟に　心へたてぬ声のさむけさ　條
日5　3　名残ありとたつ空やなき舟を　知人にして鳥のうかふ也　為
※阿…の
日6　4　あま小舟つれても行やよそにまた　たつそら見えぬ浪のうきける　孝
日7　5　うかへるをのか友とや水鳥の　はかなく舟に馴てきつらん　隆
※つ（ぬ）。日・伏・阿・雪…つ
日12　6　わたし舟しけきゆきゝも馴ぬれは　水の村鳥たつとしもなき　継
※阿…行ゑに
日14　7　水鳥の釣する舟になれくるも　綱にもれたる身をや知らん
※阿…な
日2　池水にさすや小舟のミなれ棹　見なれてつるゝ浪のうき鳥　永宣
日4　釣の海士の心かたよるいとまなみ　なれしもしらぬ浦の水鳥　和長
※日…隔てぬこゑの
日8　行舟のさほさす袖にまかふまて　まちかき浪にあそふをしかも　雅綱
日9　たえすミるつりの小舟はをとろにて　行来につるゝ水のうきとり　伊長
※日…おとろかて。※2日…な
日10　行かよふ入江の舟のミなれ棹　ミなるゝ鳥のたつ空なき　元長
日11　すて小舟おなしいり江の波の上に　つかはぬをしの影ならふらん　守光
日13　舟わたすゆきゝになれて川浪の　たちもさはかぬ水とりのこゑ　公音
日15　江の水にちかくなれ来てつなきをく　舟にともねのをしかものこゑ　重治
※日…お
日16　鴨といふ名をなつかしみ水とりや　なれてともなふうらのとも舟　季種

十五日　雪中残鳫　冬の11　66

8首のみ（御製・実隆・政為・和長・済継・公條・為孝・雅綱）

日1　1　雪の中杯にをくれてくる鳫や　花の春にもしゐてとゝめん　條
※日・雪…ひ。伏・高…ゐ

日2　2　花とミは今もかへらん心かも　まことの雲に残るかりかね　長
※雲（雪）

日3　3　こしちよりめなれてやこし都には　けふこそ雪の初かりの色　隆
※阿…きり

日5　4　天津風都の今を思ひ出よ　こしちの春の雪にかへらハ　為
※風（鳫歟）。高…鳫。※2日・版…こゝら。※3阿…くらへは。高…かへらは（くらへてイ）

日10　5　をくれこし心よいかにあまつかり　迷ふハ雪の道ならすとも　孝

日11　6　はらひわひ雪をや鳫のうらむらん　をくれてこしハ心なからは　継
※阿…な。※2て（にイ）。伏・阿…に。高…は（にイ）

日13　7　鳫やしる越路にのこる春よりハ　都は雪の今もあさしと
※阿・列…も

日16　8　人帰る田つらの里の雪のうちに　跡をたつねて鳫そあちくる　綱

日4　われも又はらひかねてハ降雪に　あまとふ鳫の心をそしる　康親

日6　都にも日をふる雪をいとひてハ　なを南にとかりやゆかまし　伊長

日7　こし路より旅なる空にうかれきて　ミやこの雪にまよふかり金　元長

日8　なく鳫のつはさそ白きふる雪に　たか玉つさのもしハきへけん　永宣

日9　穐のそらにをくれし聲か曇なき　たの面の雪におつるかりかね　守光

日12　しほれこし露霜のミかはらひえぬ　雪ふりはへて鳫のなく聲　季種

日14　ふる雪のふかきあわれをしれとてや　秋にをくれて鳫のくる空　公音

日15　ミこしちをいく過きてふる雪の　ミのしろころも鳫のなくらむ　重治

十六日　眺望山雪　冬の12　67

9首のみ（御製・実隆・政為・重治・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日1　1　いつる日の紅ふかき雲の色に　花こそにおへ雪の山のは　條

日3　2　今朝の朝け嶺白妙に降しきて　雪もあなしの山かつらせり　隆

日4　3　一すちの峯のかけ橋猶見えて　ふりわくる雪に山風そふく　為

日8　4　なかめこし霞も霧もなにならて　雪におしまぬと今朝の山の端　光
※日…為孝

日9　5　面影もみさりし山の今朝はれて　しらぬ日比の雪もめつらし　継

日11　6　空にのミ雲をつくせる月もいさ　雪に晴てそ山のはもなき
※阿…ま。※2も（はイ）。列…は

日12　7　ふしのねの煙もそれと面影に　たつやをひえの雪のしらくも　治

日15　8　はる〳〵とハてもなからの山みえて　雲の花なるしかのからさき　綱
※雲（雪）。※2な（ち歟）。日・伏・高…ち

日16　9　朝戸あけてむかふよそめは春秋も　をよハぬ色や雪のとを山　親

日2　しるやいかに深山の雪に都おもふ　人もありやとかはす心は　和長

日5　袮はらもうつもれはつる今朝の雪に　つくりいたせるやまそかさなる　元長

日6　うつもれてさとこそ見えね行人の　はしうちわたすゆきの山しと　永宣
※日…した

日7　おもひやる心のいろに降つみて　いくへか高き雪の山のは　守光

日10　ときのまにふりしく雪やはれそめて　此さとちかきやまをミすらん　季種

日13　しろたへになへてつもれる雪にしも　山のすかたはさま〳〵にして　公音

日14　ときはなる色こそなけれ白妙に　千里くもらぬ雪のとをやま　伊長

十七日　雪埋苔径　冬の13　68

9首のみ（御製・実隆・政為・重治・済継・公條・為孝・康親・雅綱）

日1　1　苔なりし道もおのへにうつもれて　つもれる雪のたかまとの宮　長

日2　2　ふす苔のまほには誰も待もミん　さしも日比の雪の木かくれ　隆

※日・版…山陰。伏・雪・阿・高…木かくれ

日5　3　たえ〳〵に苔の細道そなたにも　雪より後は行人もなし　為

※に（のイ）。高も同様。日・伏・阿・古…の。※2日・伏・阿・古…れ

日8　4　ふミわけて今朝や中〳〵跡もミん　苔ちのよるの雪のふるさと　光

※日・伏…うへ。高…上

日9　5　岩かねやあしもたまらぬ苔の上に　やすくも雪のつもりぬるかな　孝

日10　6　たえハて、思ひし物を苔の上の　雪にハ稀の跡も見えけり　継

日11　7　ふりゆくは苔にもみえし道なから　又今更の雪のやまさと

日13 伏12　8　今朝はなを山路の苔のあともなし　雪や世にふる人いとふらん　音

日15　9　雪のうちはかれの、ほかにたのミこし　いはねの苔の道も絶けり　條

日3　ふりうつむ雪をかこたむわか身かハ　苔にもたえしやとの通路　康親

日4　吹はらふ嵐のまつの梢たに　雪のしたなる苔のかよひ路　永宣

日6　ふりつもる雪にいく重かうつむらん　たとりなれたる苔のかよひ路　伊長

日7　人とはて苔むす庭ハふミわくる　雪のしたにも道たとるなり　元長

日12 伏13　日ころふる雪にむもるゝやまかけは　いつかみとりの苔のかよひち　季種

日14　岩かねの苔のみとりやはらひゆく　やまの雪のしるへなるらむ　重治

日16　苔のうへハなをあとみえて山人の　かよひし道も雪にたえつゝ　雅綱

十八日　爐火似春　冬の14　69

欠…公音・元長・済継・重治・季種

日2　1　たきものも名にたつ梅の花の香に　時も春なる埋火のもと　宣

※日…と。伏・高…も

日3　2　かりそめも春のこゝろのありかほは　何にかミせん埋火のもと　長

※日・版…たとえへても。伏・高…かりそめも

日4　3　さやる夜もさなから春とむかひゐて　おりを忘るゝ埋火のもと　綱

日5　4　むかひゐて心のとけき埋火に　またるゝ春やまつかよふらん　長

日7　5　鶯もなかぬかきりの春の色も　まつしりをむる埋火のもと　條

※日・伏・高・雪…の。※2日…は。伏・高・雪…も

日8　6　埋火のかすかなるにも春の色は　まつかよひくる夢の手枕　孝

日10　7　あくる夜の霞の色もうつミ火の　光よりミるねやののとけさ

日11　8　むすふ手に夏なき水もとハかりや　むかへハ春の埋火のもと　隆

日13　9　花にさく灯ならぬ埋火の　光を春とみるものとけし　為

日14　10　消やらぬ光をたのむ埋火に　すゝむねふりや春の一とき　親

日15　11　折しもあれかつ咲梅の色香にも　春いそかれぬ埋火のもと　光

日1　うちとくるはるの氷かうつミ火に　向てかたる人のこゝろも　公音

※日…は

日6　夢とまつさきちる花も見えなん　春をもつゆかうつミ火のもと　元長

※日…に

日9　むかひ見る心を春の雪なれや　とけてのとけき埋火のもと　済継

日12　空たきのたもとハ春のむめか香の　それかとくゆる閨のうつミ火　重治

日16　さえかへる風のをして春とのミ　おもひはてぬるうつみ火のもと　季種

※日…おと

十九日　老人惜歳　冬の15　70

1　春をまつ心はかりの暮たにも　おしかりし身に年のつもれる　隆
2　世中の名残はたえず思ふ身に　又年くるゝ老そかなしき　為
※雪…にたに。※2日・伏・雪…を。高・阿…お
3　身につもるかしらの雪の翁川　行年なミをうきせとそミる　宣
4　老らくをよそに歎かは年波の　身にこゆるをはしらすとやいはん　親
日6　5　わきて猶おしむもさそな老のなミ　帰らぬ年の暮て行そら　伊長
日7　6　老の身に過こしほとをくるとも　おしかるましき年のくれかハ　元長
日9　7　ミな人の老をかへさん薬もか　暮行年はかきりあるにも　條
日11　8　かそふれはまとふへきにもあらぬ身の　年をいつくに暮るとか思ふ　継
日5　9　さらになを何をしむらん老らくの　身にのミこえてつもる年哉　雅綱
日8　10　この暮に又たちこへん年なミも　老のたもとハ先をしむらん　守光　※日…お
日10　11　年ハいまたゝ我のミのかきりとか　いふにも老のあわれをそしる　為孝　※日…は
12　つれなくも残るとミゆる老のうへに　おもふともやはとしハおしまん　和長
13　をしむにもかひなきものは老のなミ　こえてかへらぬ年の暮かな　重治　※日…お
14　おほかたハをしミなれても有しより　くれやすき年をおひてしる哉　季種　※日…お
15　老やうきかしらの雪も行としも　つもれるとしの上につもれは　公音　※日…そ
16　つもりてはわか身ひとりそ年のくれ　年ハ春とてたちかへれとも
※れ（るイ）。日・伏・阿・列…る。高…れ

春の部補足（前回の翻刻で脱落していた九月二十四日分）
廿四日　山寒花道　春16

1　山ふかミ谷の氷もはるしらて　またうちとけぬ花のひもかな　元長
2　山ふかみ春またさむしよしさらハ　花とミる迄雪もふらなん　雅綱
3　咲やらぬ枝ふきしほり山さむき　あらしそ花の散よりもうき　実隆
※阿…る。※2き（ミイ）。日・伏・高…き。雪…み
4　吹やらぬ木陰におつる山水の　音のミさえて花のかもなし　政為
5　山ふかくとひこし花はつれなくて　こその嵐にかへるさむけさ　重治
6　消あへぬと山の松の雪の色に　花をことハる春のさむけさ　公條　※雪…わ
7　尋てもまた春さむをやまさくら　かつ咲色もいかてミるへき　伊長
8　外のちる後にと花を山風の　おもふにさゆるこゝろなりせん　為孝
9　さかぬまの花にたとらん面かけも　また雲さむき山風そ吹　康親
10　山守はをのかさむさやこたへまし　花のうへこそ人ハとふなれ　和長
11　さきいてん後ハかせなき花ならハ　しはしミ山の春さむくとも　重種　※季の誤り
※日…太山　注…みやま＝深山・太山。反意語は、とやま＝外山・端山
12　さえかへる山路にのこる雪の色を　えたの花ともいつかまち見む　済継
13　よそにして花にうらみしつれなさを　あらしにかこつ春の山かけ　公音
14　さきぬへき花もつれなしふく風の　また身にさむき春の山ふミ　永宣
15　待人に心のとめてさえかへる　太山はなのあらましもなし　守光
16　さきいてん花をしらす雲のゐる　軒はの山の風のさむけさ
※日・伏・高…をも